

# 令和3年（2021年）人間環境大学看護学部卒業生アンケート調査結果

## I. 調査概要

1. 実施期間：令和3年9月16日～9月30日

2. 調査対象：2018年度・2019年度・2020年度卒業生が就業する67施設

2018年度卒業生 94人 2019年度卒業生 96人 2020年度卒業生102人調査方法：管理者：無記名自記式アンケート調査  
卒業生が就業する施設に質問紙を送付し、回答を依頼した。

卒業生：Googleフォーム

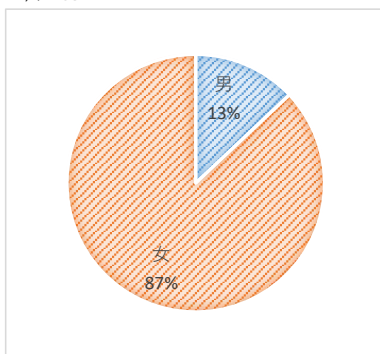
## II. 調査結果の概要

### 1. 対象の概況

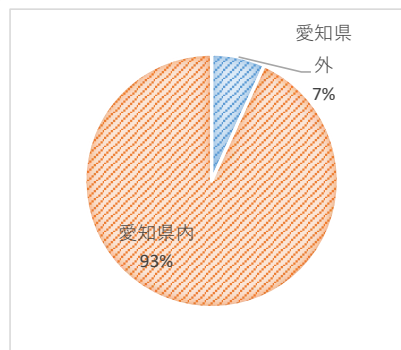
総数	67施設
返信	40施設
回収率	59%

	卒業生	回答数	回答率
2018年度	94	33	35.10%
2019年度	96	42	43.80%
2020年度	100	57	57%

#### 1) 性別



#### 2) 居住地



### 2. 就業状況

#### 1) 就業状況

仕事をしている	129
仕事をしていない	0
休職中	2
学生	対象外

#### 2) 就業免許

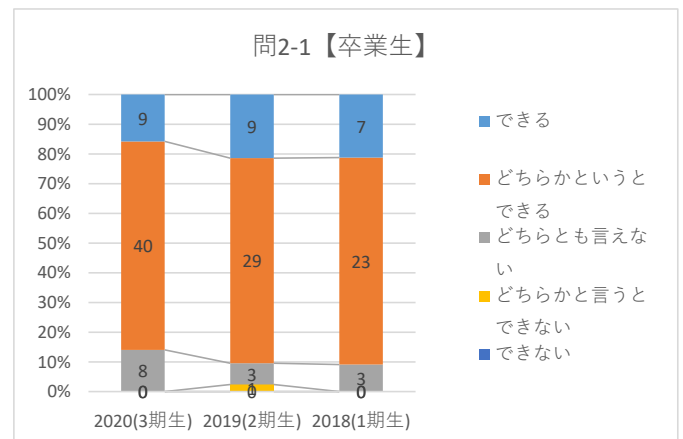
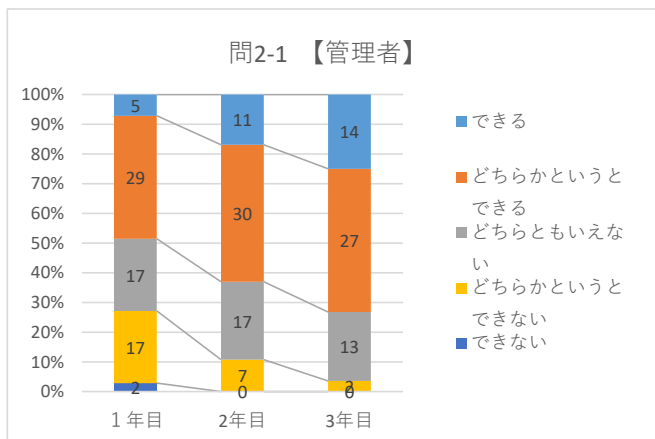
看護師	128
保健師	2
養護教諭	1
無回答	

#### 3) 就業場所

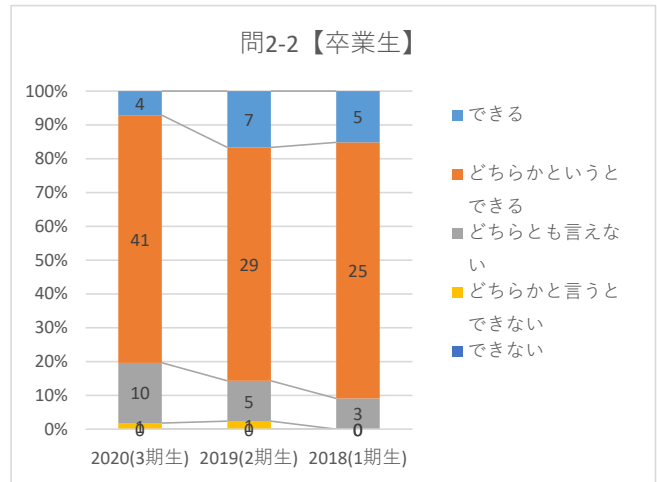
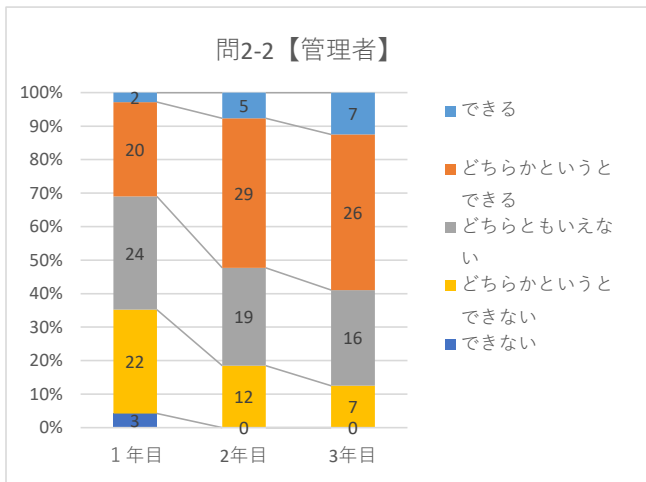
一般病院	129
診療所	0
学校	1
保健所・保健センター	2
無回答	

### 3. 看護実践能力評価（自己評価、管理者評価）

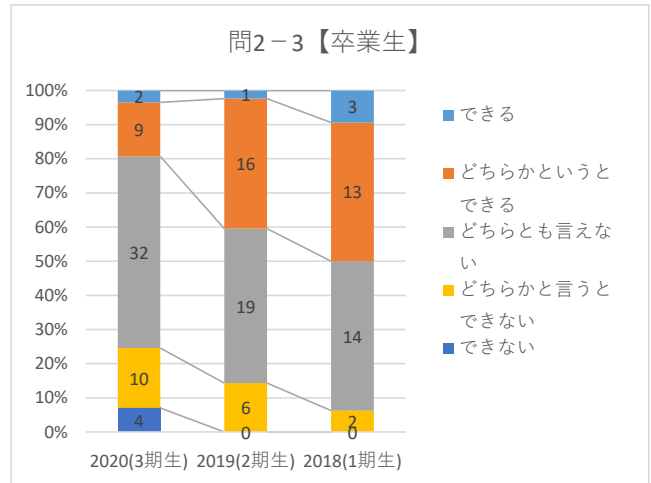
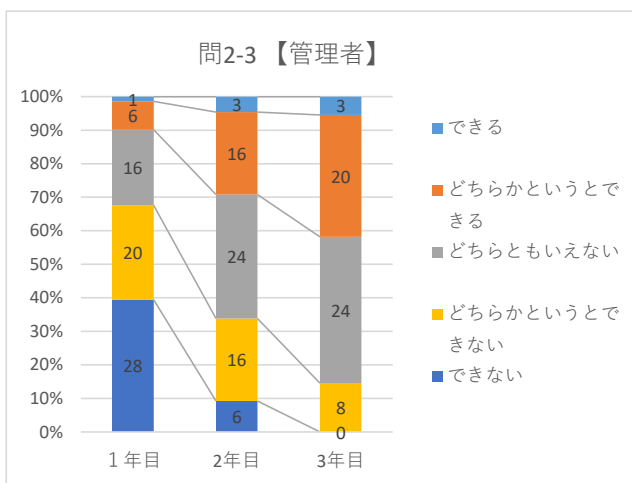
#### 問2-1 正確な知識と技術を対象に安全で基本的な看護実践



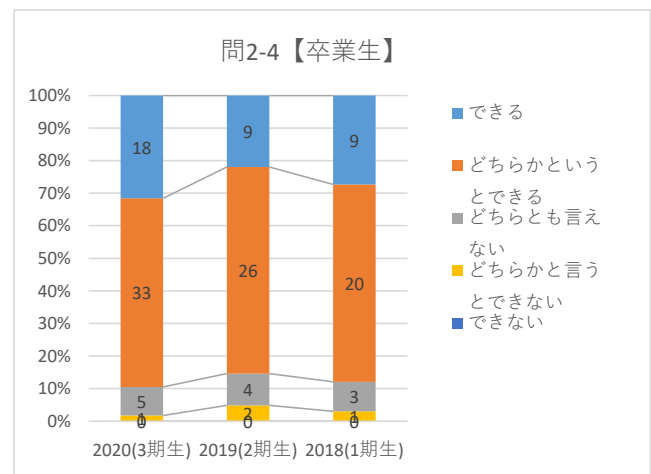
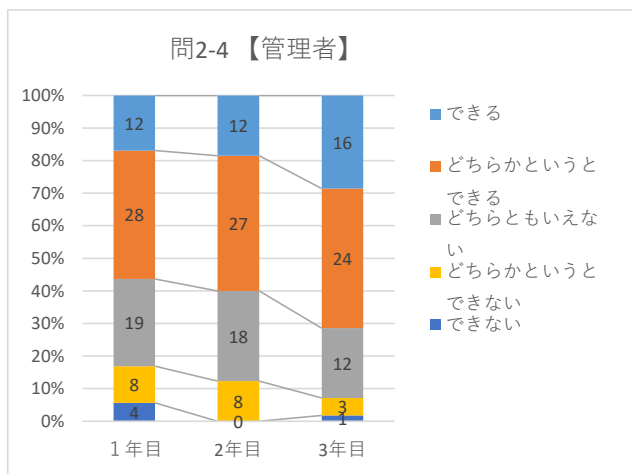
問2-2問題解決に向けた対象の特性に応じた看護実践



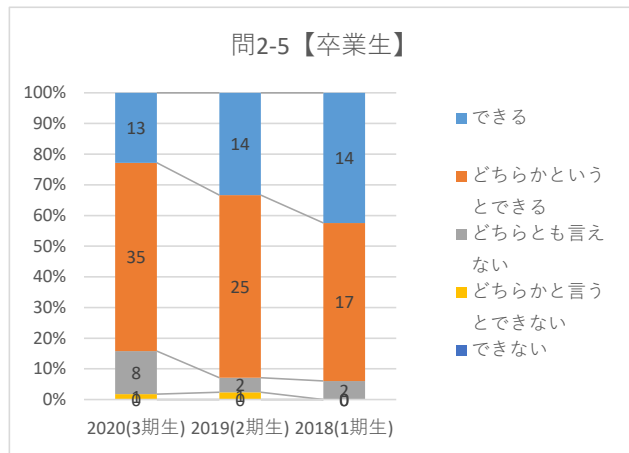
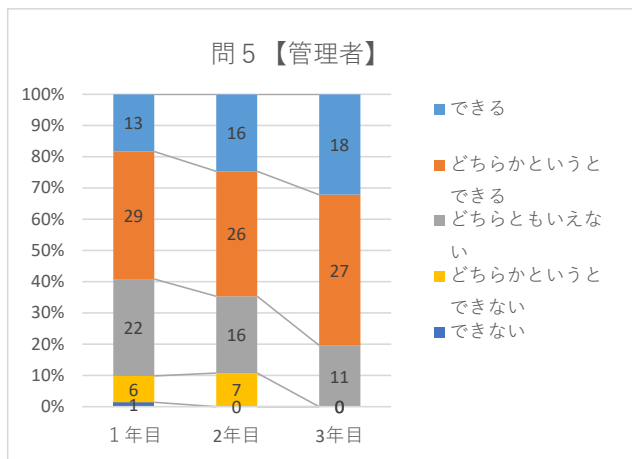
問2-3緊急時の対応



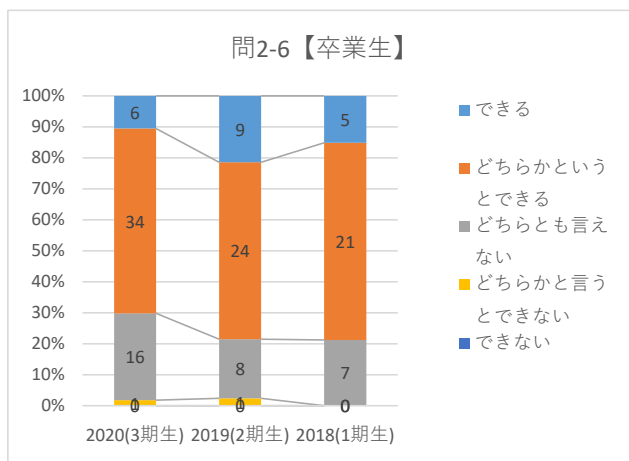
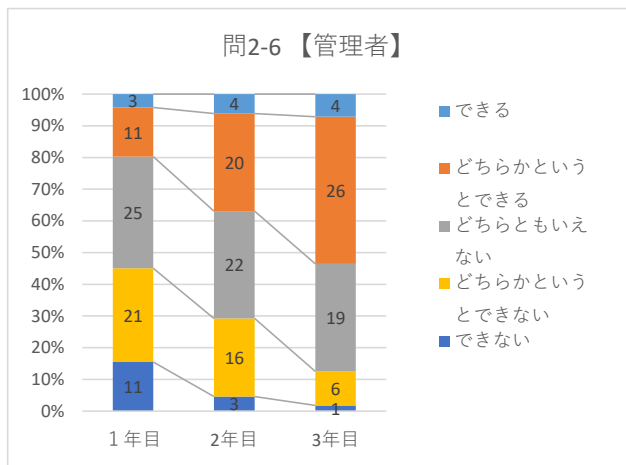
問2-4看護実践や自己の成長のために他者の支援を求めること



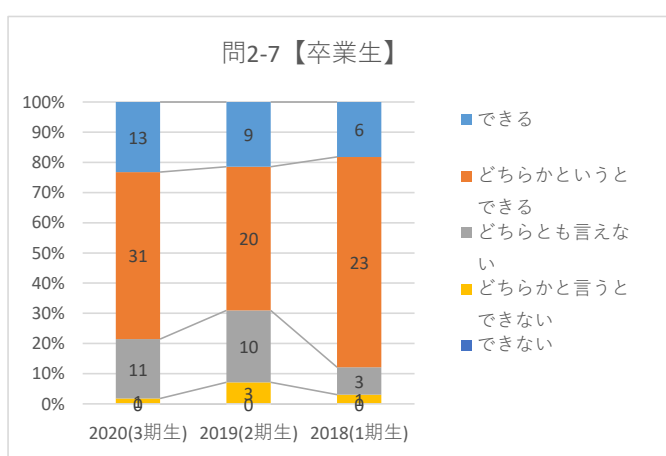
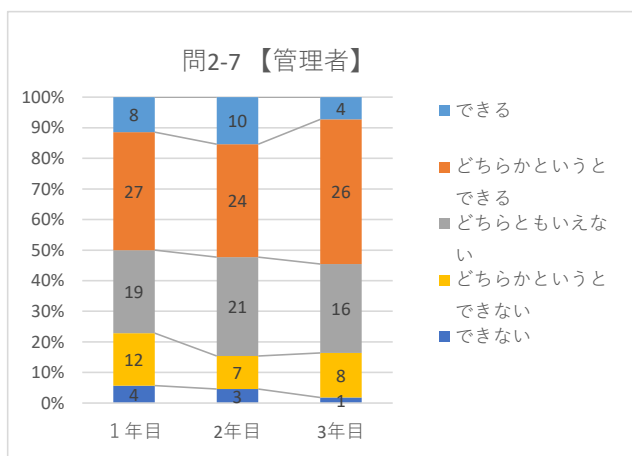
問2-5チームの一員として自分の役割を認識した行動



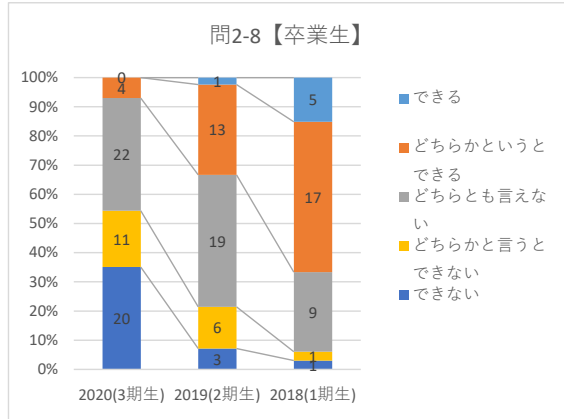
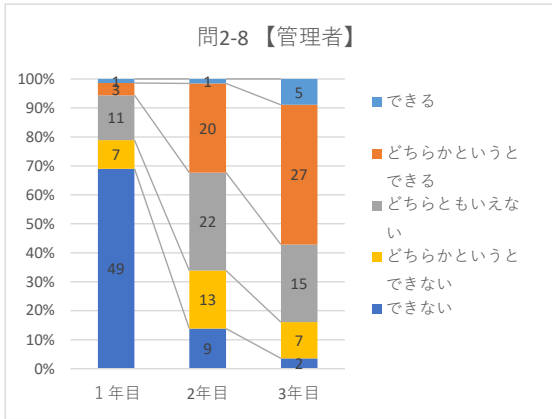
問2-6日常業務の中での問題提起



問2-7主体的に学習の場を求め、自己の課題に取り組むこと

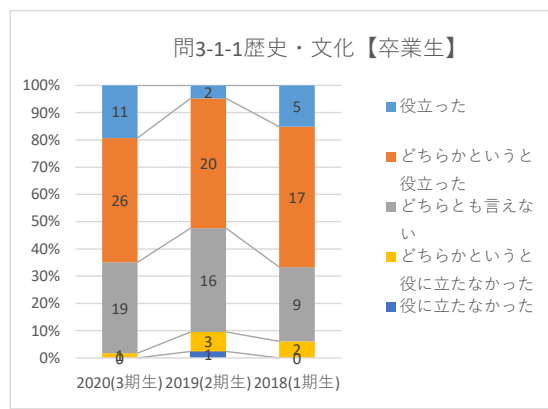
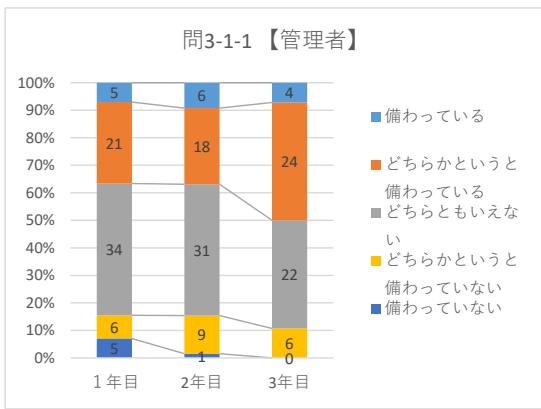


問2-8後輩や学生を指導すること

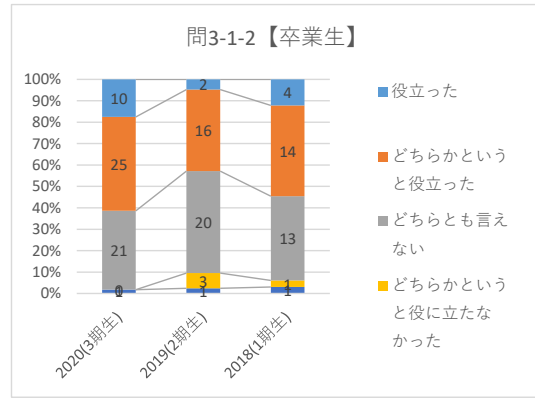
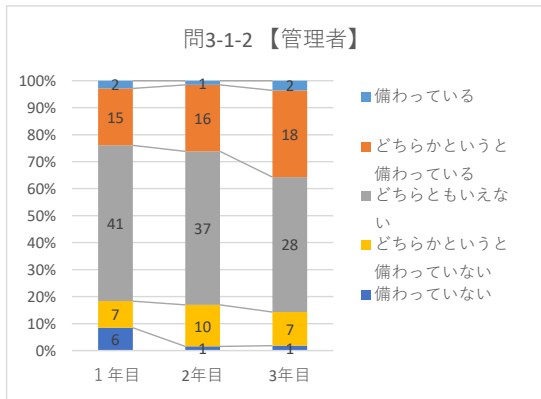


4. 学部教育での学びについて、ディプロマポリシーを評価

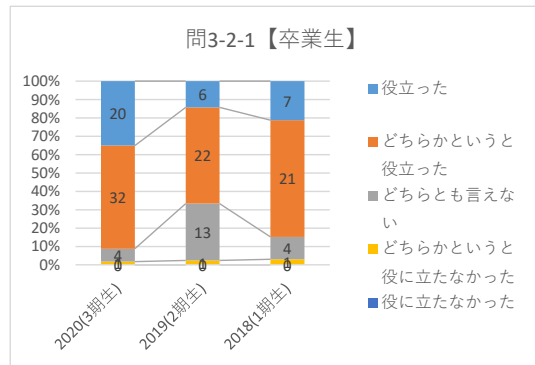
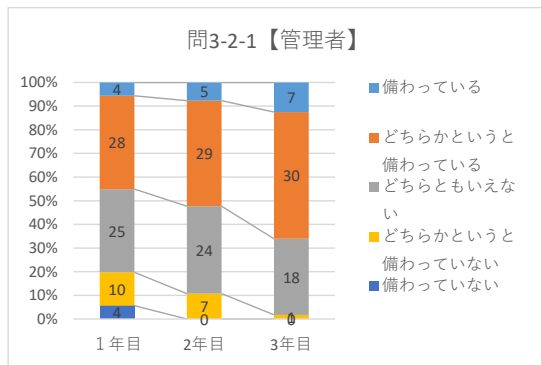
問3-1豊かな人間性と広い視野1：歴史、文化、社会、環境と人間に関する幅広い教養を持ち、人々の多様性を理解し、人間関係を築くことができる



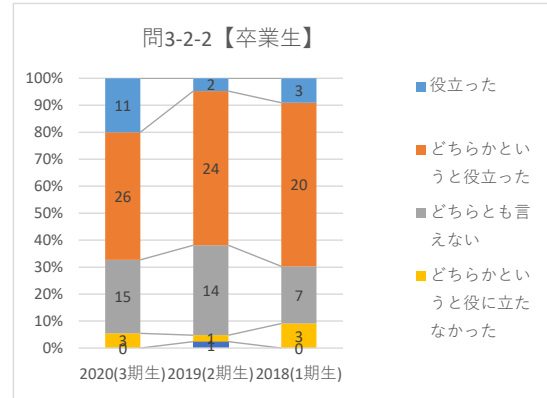
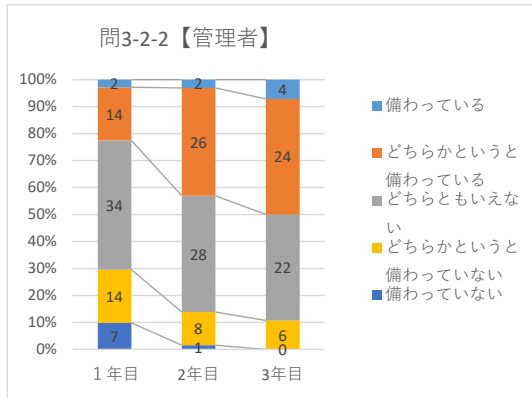
問3-1-2豊かな人間性と広い視野2：グローバルな視野を持ち、人々の多様な健康ニーズと生活を多面的に捉えることができる



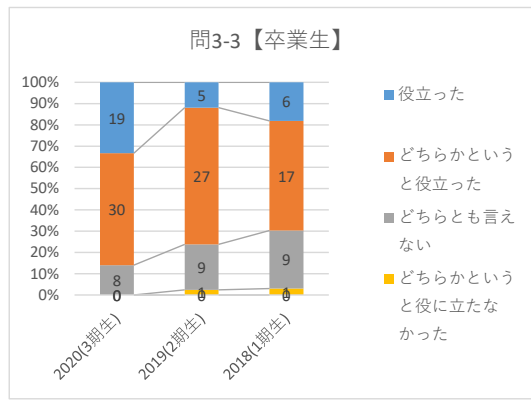
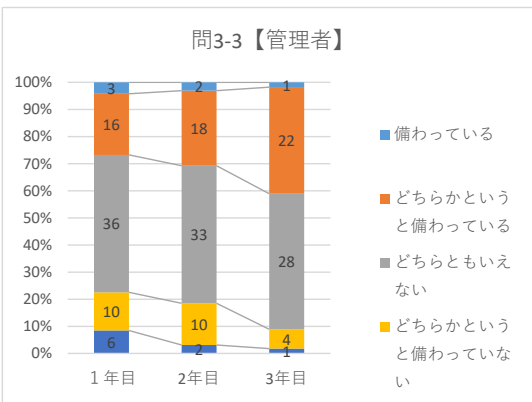
問3-2-1看護の専門的知識・技術1：人々の健康ニーズに対応（予防、改善、解決）するための看護実践に必要な基礎的能力を身につけている



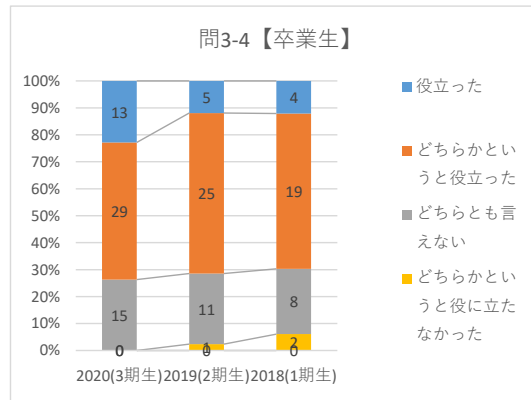
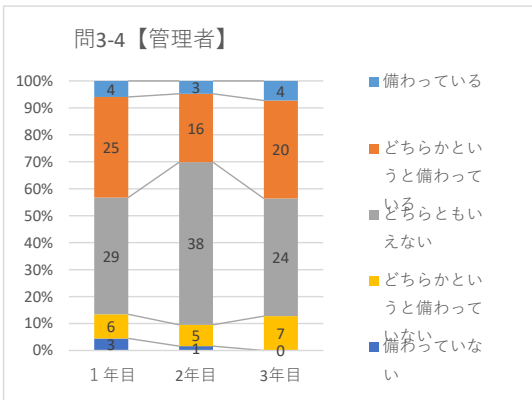
問3-2-2看護の専門的知識・技術2：保健医療福祉において調整・連携し、協働する能力を身につけている



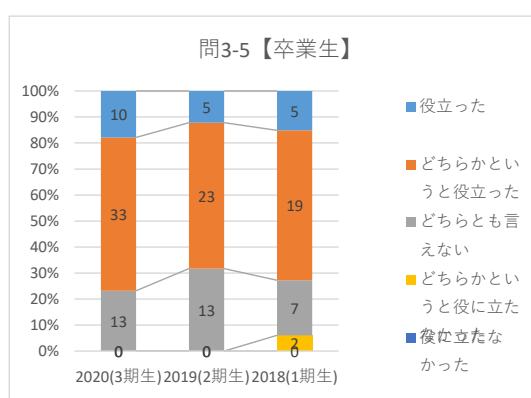
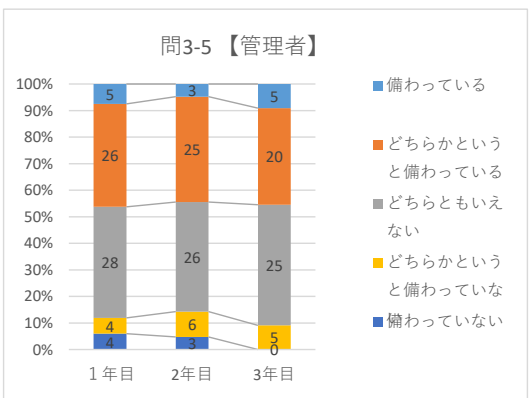
問3-3看護専門職としての判断力：専門職業人としての高い倫理観をもち、科学的・論理的思考に基づいて判断することができる



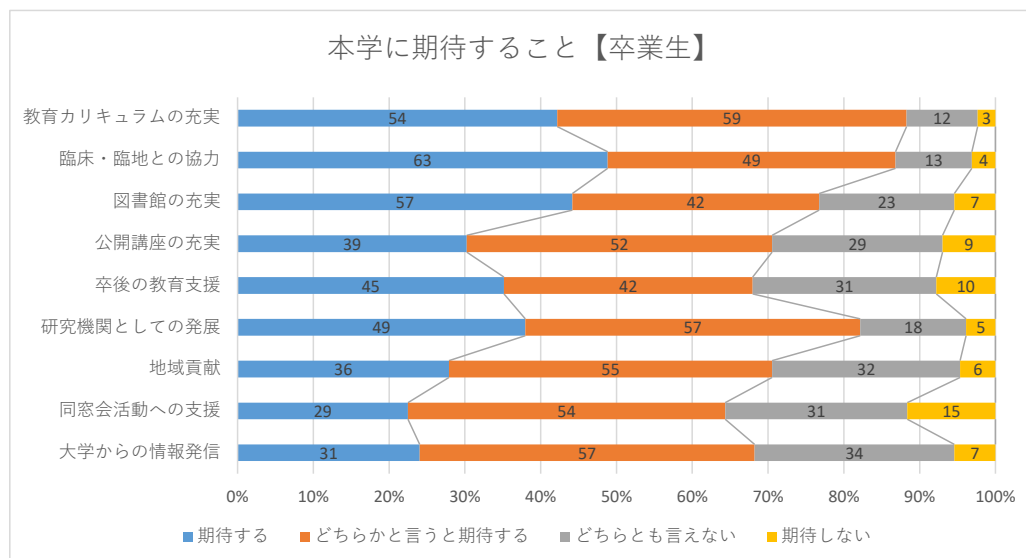
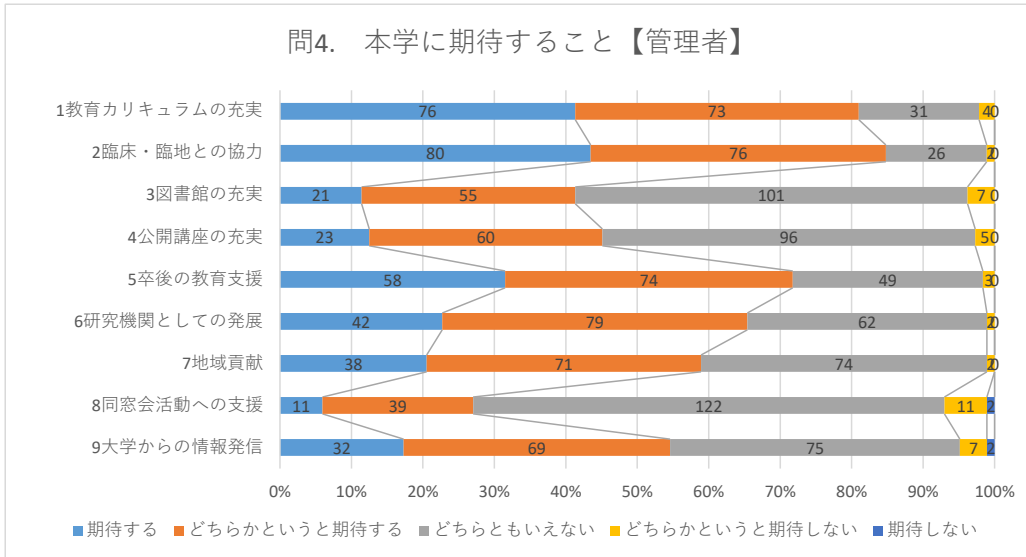
問3-4看護の質向上に向けて探究心：人々が健康に生きるための支援を科学的に探求するための基礎的能力が身につけている



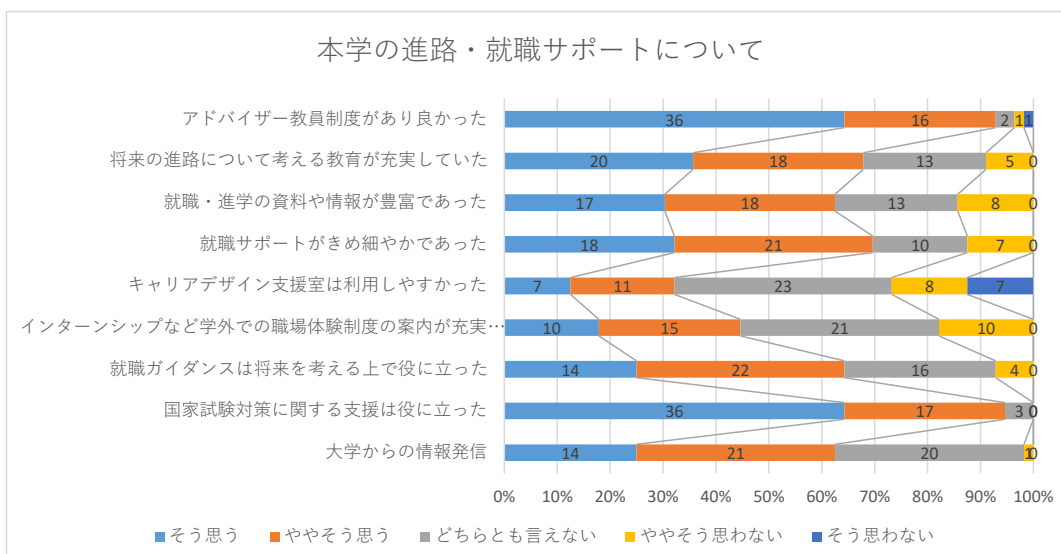
問3-5継続的自己研鑽：保健医療福祉に貢献するために専門的分野についての継続的自己学習能力を身につけている



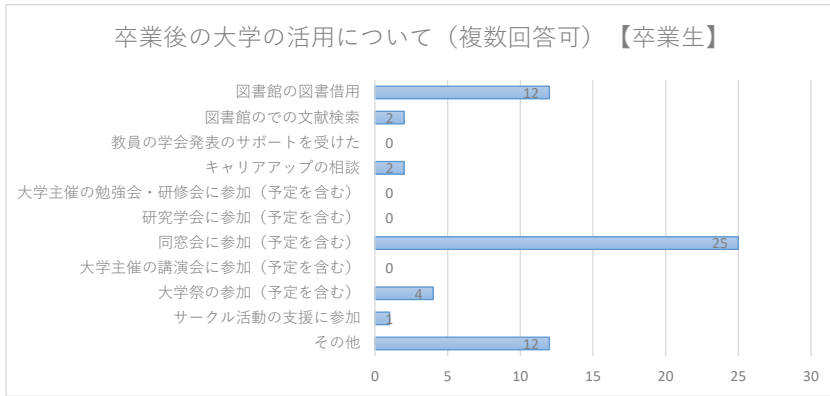
## 5.大学に期待すること



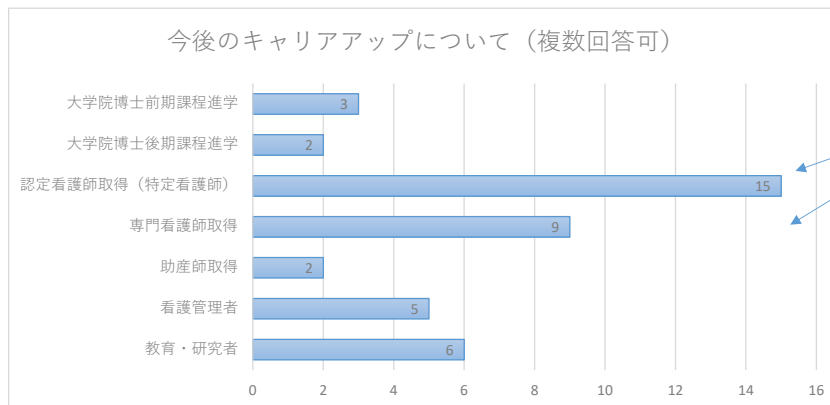
## 6.本学の進路・就職サポート：卒業生対象



## 7. 卒業後の大学の活用：卒業生対象



## 8. 今後のキャリアについて：卒業生対象



### 認定看護師あるいは専門看護師にチェック

#### した方の希望分野

- ・救急
- ・認知者
- ・緩和ケア・がん性疼痛
- ・摂食・嚥下
- ・癌性疼痛
- ・クリティカルケア
- ・集中治療
- ・手術室
- ・在宅看護
- ・精神看護
- ・糖尿病
- ・皮膚や排泄ケア
- ・救急認定

## 卒業生アンケート結果（令和3年9月実施）

1～3期生290人のうち132人（57%）から、また卒業生が就業している67施設のうち40施設（59%）から回答があった。

### ● 就業状況

9割以上の卒業生が県内に在住し、ほとんどが看護師として就業しているが、一部の卒業生は、保健師や養護教諭として就業している。看護師の就業場所は、ほとんどが一般病院であり、保健師や養護教諭は保健センターや学校で就業している。

### ● 正確な知識と技術を対象に安全で基本的な看護実践能力

約90%の卒業生が、安全で基本的な看護が実践できていると自己評価している一方、管理者は、1年目に約50%だったものが、3年目には約70%まで実践できるようになったと評価している。経験により年々卒業生の数字は上がっているが、管理者からは、もっと高いレベルを期待されている。

### ● 問題解決に向けた対象の特性に応じた看護実践能力

85%の卒業生はできていると評価しているが、管理者は46%しかできていないと評価している。卒業生と管理者の評価に大きな差があるので、少しでも早くこの差を縮めるための努力が必要である。

### ● 緊急時の対応能力

1年目の卒業生は20%しかできなかったものが、3年目には50%まで対応できるようになったと評価している一方、管理者は、1年目には10%しか対応できなかったが、3年目には41%までできるようになったと評価している。いずれにしても経験を積むことで、年々緊急時の対応ができるようになっていくと考えられる。

### ● 看護実践や自己の成長のために他者の支援を求めること

ほとんどの卒業生が支援を求めることができると評価しているが、一部うまく支援を求めることができない卒業生がいる一方、管理者は、1年目には56%だったものが、3年目には70%以上が支援を求めることができるようになったと評価している。一日も早く職場に慣れて、成長していくことを期待する。

### ● チームの一員として自分の役割を認識した行動

3年目の卒業生は、90%以上自分の役割を認識した行動ができるようになったと評価している一方、管理者も3年目には80%ができると評価しており、双方に大差は無く、チームワークの重要性を認識して行動していると思われる。



- 日常業務中での問題提起  
卒業生3年目には約80%が問題提起できると評価している一方、管理者は、3年目になっても53%しかできていないと評価している。卒業生からすれば問題提起しているつもりでも、管理者からすれば物足りなさを感じているとも思われる。
- 主体的に学習の場を求め、自己の課題に取り組むこと  
多くの卒業生が取り組んでいると評価しているが、管理者は50%程度しか取り組んでいないと評価している。今以上に自ら学習し、自己研鑽を積むことによって職場での評価が上がることを期待する。
- 後輩や学生を指導すること  
卒業生も管理者も年々率は上昇し、60%程度までできると評価している。経験を積むとどこの職場でも同じだが、先輩と後輩の関係が密で良好な関係が築くことで、各々への役割に対する期待が大きく、今後の成長を期待する。
- 豊かな人間性と広い視野  
学部教育が役立ったと60%程度の卒業生が評価しているが、管理者は30~40%程度しか備わっていないと評価している。幅広い教養や多様性、グローバルな視野を身に着けるには、大学教育で学んだことをきっかけとして、日常生活の中で積極的に情報収集する努力が必要であると考えられる。
- 看護の専門的知識・技術  
多くの卒業生が、人々の健康ニーズに対応するための看護実践に必要な基礎的能力や保健医療福祉において調整・連携し、協働する能力を身に着けるのに役立ったと評価している。一方、管理者は、経験を積むほど専門的知識や技術が備わっている率が上昇していると評価している。専門的知識や技術は日進月歩で進化しており、卒業生すべてが日々努力することが求められる。
- 看護専門職としての判断力  
専門職業人として高い倫理観をもち、科学的・論理的思考に基づいて判断することに70%以上の卒業生が役立ったと評価している。一方、管理者は、それらの判断する能力が3年目でも40%程度しか備わっていないと評価している。しかし、少しずつではあるが、備わっている率は毎年上がっており、経験を積みながら継続して努力することが求められる。
- 看護の質向上に向けて探求心  
人々が健康で生きるための支援を科学的に探究するための基礎的能力を身に着けるのに役立った卒業生が70%程度いる一方、管理者は40%程度しか備わっていないと評価している。この差を埋めるべく常に探求心を持って行動することが求められる。
- 継続的自己研鑽

保健医療福祉に貢献するために専門的分野についての継続は、自己学習能力を身に着けることに役立った卒業生は70%以上いる一方、管理者は、それらの能力が備わっているとの評価は50%にも満たない。さらなる自己研鑽の継続が必要と思われる。

●大学に期待すること

卒業生から期待することとして、教育カリキュラムの充実や臨床・臨地との協力、教育機関としての発展が多かった。管理者からは、教育カリキュラムの充実や臨床・臨地との協力は同じだが、卒後の教育支援が3番目に多かった。同窓会会報に卒業生もキャリアデザイン支援室を使用できることを記載している。卒業後も継続した支援を行い開かれた大学として発展していく必要がある。

●本学の進路・就職サポート

アドバイザー教員制度、国家試験対策に関する支援、この2点は非常に評価が高かった。それ以外の項目についても概ね評価は高く、今後も学生、教職員一体となって、本学のレベルアップのために努力をしていく必要があると考えられる。